＝歴史的公文書展示＝

「博覧会と共にあゆむ福岡
～変わりゆく福岡をふりかえる～」　展

展示期間:令和５年 12 月１日(金)～
令和６年１月 30 日(火)
展示場所:総 合 図 書 館 ２ 階　文書資料室

はじめに

2025 年には、大阪で日本国際博覧会(大阪･関西万博)の開催が予定されており、博覧会に対する関心が高まってきています。

福岡においては、明治以降 19 回も開催された博覧会とともに、街並みが整備され、大きく発展してきました。残念ながら、博覧会の終了後には、ほとんどの建物が撤去されてしまいますので、現地で当時の様子を窺い知ることはほとんどできません。

総合図書館のある百道浜地区でも、平成元(1989)年に、アジア太平洋博覧会(よかトピア)が開催され、多くの人でにぎわいました。博覧会に合わせて建設された福岡タワー、福岡市博物館(テーマ館として建設され、終了後博物館として開館)、マリゾン以外の施設は、終了後もしくはその後解体され、総合図書館をはじめとする公的施設や、民間の施設、住宅地などに整備されて、現在の街並みへと変貌を遂げてきました。

今回、歴史的公文書等を通して、福岡における博覧会の歴史をふりかえりながら、もう一度福岡の発展と、その中で博覧会が果たしてきた役割を再認識できる機会としていただければ幸いです。

【※歴史的公文書……文書完結後 30 年を経過し、総合図書館へ移管された福岡市の公文書】

１．博覧会とは？

博覧会とは、様々な物品や資料などを一堂に集めて一般公開する催しのことで、国際的な博覧会としては、1851 年にロンドンで開催された国際博覧会が最初のものとされています。慶応3(1867)年の第2回パリ万国博覧会に、江戸幕府と薩摩藩･佐賀藩が日本として初めて参加し、徳川昭武･渋沢栄一などがパリに赴き、日本製品の紹介を行いました。その後も日本政府として参加し、浮世絵などに代表される日本ブーム(ジャポニズム)がヨーロッパで広まったのも、こうした博覧会における日本文化の紹介がきっかけでした。

国内においても、明治 4(1871)年大学南校での物産会や京都博覧会などが、翌年には文部省が主催した湯島聖堂博覧会などが開催されました。こうした博覧会においては、新技術や新商品を広めていく狙いがありましたが、一方で文明開化の推進、廃仏毀釈運動などで見捨てられていった日本独自の美術品や伝統工芸などを収集・展示して紹介するような博覧会もあり、こうしたものが見直されるきっかけにもなっていきました。福岡県内においても、明治 6(1873)～明治 8(1875)年、3 回にわたって、太宰府博覧会が太宰府天満宮境内で開催されています。

※総合図書館には、この博覧会に関する「太宰府博覧会票告」・「博覧会目録全」等の資料【三宅剛照資料 1079～1081】が収蔵されています。内容についての詳細は、日比野利彦「太宰府博覧会と菅公一千年祭」(『太宰府市史 通史編別編 「古都太宰府」の展開』【(1007937848)、K228.4/284/ダ】をご参照ください。

明治政府は、日本の近代化を進めるためには、技術の進歩と産業の振興が不可欠であるとして、明治 10(1877)年から内国勧業博覧会を内務省主催で開催しました。この博覧会では、物品を一堂に集めることでその優劣を明らかにし、出品者の向上心や競争心を刺激して、産業自体の発展につながることを目指していました。やがてこうした動きは、地方にも広まっていくようになり、地方でも多くの博覧会が開催されるようになりました。

2．福岡における明治期の博覧会

福岡市における最初の博覧会は、明治 20(1887)年 2 月 10 日～3 月 31 日の 50 日間開催された「第 5 回九州沖縄八県連合共進会」です。九州沖縄八県連合共進会は、九州各県の農産物や工業製品の出品・展示を行い、物産の改良・発展を図ることを目的として、明治 15(1882)年長崎において第 1 回が開催されました。福岡は、鹿児島・熊本・佐賀に次いでの開催で、場所は那珂郡春吉村岡新地(現在の東中洲)で開催されました。入場者は 847,769 人を数えており、いかに関心が高かったかを物語っています。終了後、会場は各種催物の会場として利用されることになり、最初の福岡市会もここで開催されました。現在の中洲の発展は、この共進会から始まったのです。またこの共進会に合わせて、2月 20 日～3 月 31 日の 40 日間、博多崇福寺において、福岡博物展覧会も開催されました。(「福岡博物展覧會出品目録」参照【(1007900119)、三宅長春軒文庫 K250//ミ】)

九州沖縄聯合第五回福岡縣共進會場之圖
(広報課写真 149-4-1)

次いで、明治 43(1910)年 3 月 11 日～5 月 9 日の 60 日間、「第 13 回九州沖縄八県連合共進会」が開催されますが、その先駆けとして、明治 41(1908)年 10 月 1 日～10 月 21 日の 21 日間、「全国子供博覧会」が東中洲の共進館を第一会場、須崎裏(現在の須崎公園付近)の物産陳列場を第二会場として開催されました。那珂川には屋形船を運航し、両会場間の連絡船として利用しました。子どもを対象とした博覧会は、明治 39(1906)年東京上野で開催された「こども博覧会」に始まり、以後全国各地で開催されるようになったものです。

「第 13 回九州沖縄八県連合共進会」は、福岡城から那珂川まで通じていた堀のうち、現在の天神西通り付近から那珂川までの肥前堀(佐賀堀)を埋め立てて広大な敷地を確保し、そこで開催されました。多くの入場者を運ぶために、前年には博多駅(2代目、現地点から北西に約600m

の大博通り沿いにありました)が、加えて福博電気軌道の博多停車場前～呉服町(博多駅分岐線)と、大学前～黒門橋(福博本線)が開幕前には開通しており、交通網の整備が約 914,000 人もの入場者を集めることにつながりました。さらに閉幕後には、会場内を通る博多電気軌道の「循環線」敷設工事が開始されるとともに、多くの施設が建てられ、現在の天神の街の基礎が形づくられていきました。

「共進會全景」(広報課写真 149-3-1)

3．大正時代の博覧会

大正時代には、全部で 6 つの博覧会が開催されました。大正3(1914)年 4 月 23 日～6 月 30 日の 69 日間、下警固法印田(現在の博多大丸･西日本新聞会館付近)を会場にして、「明治記念博覧会」が開催されました。当初は、大正天皇の皇位継承をお祝いする目的でしたが、御大典(即位の礼)が大正 4 年に行われることになったため、「明治記念博覧会」と名称を変更して開催されました。開催前日には、博多電気軌道の循環線が開通し、入場者の運送に大きな役割を果たしました。

翌大正 4(1915)年 4 月 1 日～5 月 10 日の 40 日間には、「九州沖縄勧業共進会」が、第 13 回九州沖縄八県連合共進会の跡地を利用して開催されました。更に大正7(1918)年4月 10 日～5 月 9 日の 30 日間、須崎裏(現在の須崎公園付近)を第一会場、大濠を第二会場として、「九州沖縄物産共進会」が福岡県実業団体連合会の主催で開催されました。

そして、大正時代の博覧会で最大規模だったものが、大正9(1920)年 3 月 20 日～5 月 20 日の 62 日間、九州電気協会と化学工業協会が主催して開催された「福岡工業博覧会」でした。会場は第一会場が須崎裏(現在の須崎公園付近)、第二会場が西公園下の埋立地で、入場者は 91 万人に達しました。

「福岡市工業博覧会第一会場内」
(古文書資料「平成12年度古文書資料目録 6」その他購入資料 59)

大正時代は、大正3(1914)年に始まった第一次世界大戦による好景気の影響で、従来の繊維産業だけでなく、重化学工業が急速に発展するとともに、動力の中心が蒸気力から電力へと転換する時期にあたります。この時代には、従来のような県や市が主催するものだけでなく、民間企業や団体が中心となった博覧会が開催されるようになり、展示物も最新の工業製品や化学製品が多く見られるようになります。また電気を使ったイルミネーションが施され、子ども達も含めた家族で楽しめる遊園地のような性格を併せ持ったものが多く見られます。さらに度重なる戦争の後、日本の統治下となった台湾や朝鮮などを紹介する施設も増えていったことが特徴です。

大正 10(1921)年4月1日～5月 10 日の 40 日間開催された「コドモ博覧会」(福岡日日新聞社主催)と、その翌年 3 月 25 日～5 月 15 日の 52 日間開催された、「(黒田)長政公三百年祭記念家庭博覧会」(福岡市工芸団体連合会と福岡市十日会主催)は、子どもや家庭をテーマにし、娯楽の要素を取り入れながら、実用かつ効率的な考え方を広めていく上で大きな役割を果たすことになりました。

４．昭和初期の博覧会

昭和 2(1927)年 3 月 25 日～5 月 23 日の 60 日間開催された「東亜勧業博覧会」(福岡市主催)は、福岡城の西側にあった大堀(濠)の一部を埋め立てて、124,000 坪(約 409,200 ㎡)の土地を造成し、そこを会場として開催されました。日本国内各地だけでなく、中国・朝鮮・樺太・台湾・南洋諸島からも出品され、479,000 点が出品された大規模なもので、福岡の新聞社が協賛した子ども向けの施設も充実していました。博覧会の開催に合わせて市内電車の城南線(西新町～渡辺通 1 丁目)が 3 月 26 日に開通し、市内バスの運行も 4 月 1 日から開始されました。そのため総入場者は 1,603,472 人となり、大成功を収めることができました。博覧会終了後、会場は「大濠公園」として整備されるとともに、会場の一部は宅地として販売されたことで、博覧会の予算を補完することができました。

「東亜勧業博覧會々場之全景」
(郷土資料【1009644954】、K606/263/ト)

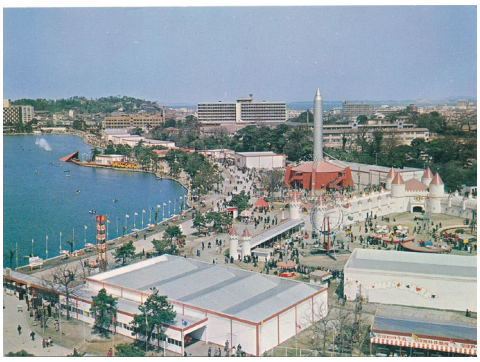
翌昭和 3(1928)年 4 月 1 日～25 日の 25 日間には、箱崎浜汐井参道で、福岡日日新聞社と海軍協会福岡県支部の共同主催で、筥崎八幡宮造営奉祝記念「海軍博覧会」が開催されました。次いで昭和 10(1935)年 10 月 12 日～17 日の 6 日間、福岡県主催の「第 8 回九州連合畜産共進会」が、九水グラウンド(現在の薬院 4 丁目付近)で開催されました。各県で飼育された牛・馬・豚・羊・鶏など 380 頭(匹)が出展されており、大盛況だったようです。

「博多築港記念大博覧會　正門」
(古文書資料「平成12年度古文書資料目録 6」その他購入資料 71-7)

博多港の修築工事(第 1 期)が竣功(しゅんこう)するのを記念して、福岡市が主催する「博多築港記念大博覧会」が、昭和 11(1936)年 3 月 25 日～5 月 13 日の 50 日間、75,000 坪(約 247,500 ㎡)の新埋立地で開かれました。この博覧会の目的は、朝鮮や満州への一大玄関である博多港と福岡を紹介し、産業と商業を盛んにするとともに、観光都市としての福岡の魅力を広くアピールすることにありました。出品された点数は、316,024 点にも及び、総入場者も 1,608,119 人となり、福岡は九州の拠点都市としての地位を固めていくことになります。またこの年には、那珂川の「西大橋」の架け替えや、「雁ノ巣飛行場」の開場など、交通体系の充実も図られました。

昭和 12(1937)年から始まった日中戦争が長期化する中、次第に戦争への協力が求められていくようになりました。そのような中で開催されたのが、九州日報社の主催で昭和 14(1939)年 4 月 1 日～5 月 14 日の 44 日間、大濠公園池畔を会場に開かれた「聖戦博覧会」と、西日本新聞主催で昭和 17(1942)年 9 月 24 日～11 月 12 日の 50 日間、百道松原で開かれた「大東亜建設博覧会」です。どちらも戦時色が色濃く反映され、軍関係の資料が多く展示されるなど、日本軍の活躍を紹介するものが中心となっています。昭和 17 年には、福岡日日新聞と九州日報が統合され、西日本新聞が創刊された年であり、「大東亜建設博覧会」は西日本新聞としての最初の大事業でした。

５．戦後の博覧会



福岡博覧会会場全景
（広報課写真 154-16-1）

昭和 30 年代の後半になると、日本は急速な経済発展を遂げるようになり、福岡市の発展を内外に示す方策として、福岡市議会が博覧会の開催を市に提案しました。昭和 37(1962)年の福岡市歳入歳出予算案には、博覧会開催調査費として 30 万円が計上されており、埋立工事中の須崎ふ頭での開催が検討されましたが、他に大規模な事業が多かったため、この案はいったん白紙に戻されてしまいます。そのような中で、創刊 90 周年の記念事業として西日本新聞社が計画し、昭和 41(1966)年 3 月 19 日～5 月 29 日の 72 日間、大濠公園で開催されたのが、「明日をつくる科学と産業－福岡大博覧会」でした。当時は米ソの宇宙開発競争が激化していた時代でもあり、「月旅行船」やロケットの実物大模型が展示された「アメリカ館」・「ソ連館」は大人気でした。その他にも、生活に関する最新技術が紹介され、多くの入場者を集めました。

昭和 50(1975)年、山陽新幹線の岡山～博多間の開通を記念し、西日本新聞社・福岡県・福岡市の共催で 3 月 15 日～5 月 25 日の 72 日間、「新幹線開通記念　福岡大博覧会」が大濠公園と舞鶴公園の一部で開催されました。昭和 47(1972)年に日本と中華人民共和国との国交正常化が実現しましたので、中華人民共和国をはじめ、アジア・ヨーロッパの国々からの展示物も多く出品されていました。

スペースシャトル　コロンビア号
（広報課写真 57218-16）

昭和 56(1981)年天神～室見間で福岡市地下鉄 1 号線が開通しました。この開業記念として、西日本新聞社主催、福岡県・福岡市共催のもと、昭和 57(1982)年 3 月 19 日～5 月 30 日の 73 日間、大濠公園・舞鶴公園で「地下鉄開通記念　ふくおか'82 大博覧会」が開催されました。この年は、福岡市が政令指定都市となってちょうど 10 年、アメリカオークランド市と姉妹都市締結 20 周年、中国広州市との友好都市締結 3 周年でもあり、国際都市福岡をアピールする上でも重要な意味を持っていました。

会場内には、アメリカの宇宙連絡船「スペースシャトル　コロンビア号」の実物大模型が設置され、「宇宙科学館」など宇宙に関する施設には大行列ができていました。最終的な入場者は、1,360,850 人となり、大盛況のうちに閉幕となりました。

そして、平成元(1989)年 3 月 17 日～9 月 3 日の 171 日間、シーサイドももちで開催されたのが「アジア太平洋博覧会(よかトピア)」です。この年に市制施行 100 周年となる都市は全国で 38 あり、横浜市・名古屋市など福岡市と同様に博覧会を開催する都市も多く、テーマの設定や協力企業への要請ではかなり苦労しましたが、最終的には国内企業・団体 1,056、海外 37 カ国・地域・2 国際機関からの参加を得ることができました。マスコットマークは、漫画家の手塚治虫氏により、ニュージーランドのマウイ族のカヌーを題材にしたカヌーのアジア号に乗った少年「太平くん」と少女「洋子ちゃん」が様々な出会いを求めて九州にやってくる姿が表現されています。昭和 62(1987)年頃からは、パリ万博の際に造られたエッフェル塔を参考に、福岡タワーの建設を進めるという方針が具体化し、さらに福岡ウォーターフロントプロムナード「マリゾン」の建設も決定されました。

多くのパビリオンと様々なイベントに彩られた博覧会には、8,229,399 人もの人々が訪れました。

閉幕後の跡地は、博物館や図書館などの情報文化施設、IT 関係などの情報業務施設、スポーツレクレーション施設、住宅用地などに分けて処分されました。この博覧会を通して得られた経済効果は、来場者の消費活動や施設建設費などによる生産誘発効果(1 次効果)で 6,971 億円、これによる所得の増大や消費の拡大をもたらす 2 次効果で 3,372 億円、合計 1 兆 343 億円にも達するとの試算が出されています。(『アジア太平洋博覧会－福岡'89　経済波及効果測定調査報告書』平成 2 年 3 月、三菱総合研究所、公文書「よかトピア-総務-0040」)福岡市内だけでなく、九州の地域経済の活性化に大きな役割を果たした博覧会としても、大きな意味を持っていました。

6．おわりに

福岡市で開催された 19 回の博覧会は、その時々の時勢を反映しながら、福岡市の発展において重要な役割を担ってきました。明治 22(1889)年、福岡市が誕生した時の市域は、現在の中央区と博多区の一部で、面積は 5.09 平方キロメートル(現在の 67 分の 1)、人口は九州では長崎･鹿児島に次いで 3 番目の 50,847 人でした。

こうした状況下で開催された博覧会は、会場として広大な土地を必要とすることから、東中洲や天神、築港埋立地、大濠公園、百道浜といった場所の開発が行われ、閉幕後には官庁街や教育施設、百貨店や商業施設･企業の本社ビルなどに転用されるとともに、一部は住宅用地として販売され、博覧会収支の改善にも大きく貢献してきました。また多くの入場者を集めるために、鉄道や市内電車、新幹線や地下鉄といった鉄道網の整備を進めるとともに、空港や博多港の整備も行われていきました。全体的に入場者数は、その当時の福岡市の人口をはるかに超えるようなものが多く、大成功であったと思われます。多くの入場者は、単に博覧会の収支に貢献しただけでなく、その入場者を運ぶ交通事業者、宿泊や食事、お土産など、様々な分野に利益をもたらすことにつながりました。

また明治･大正期の博覧会は、共進会の名の通り、最新の技術や商品の紹介、表彰制度を利用した競争による技術の進歩などにつながっており、交通網の整備も進んだ福岡が九州の中心として、多くの企業の拠点が進出するきっかけにもなっています。現在、九州の中心都市として、またアジアへの玄関口として確固たる地位を築くことができた背景には、博覧会が重要な役割を果たしてきたのです。

福岡で開催された博覧会

No.	開催年	開催日	名　　称	場　　所	参加者	関連事項
1	明治20年 （1887）	2/10～3/31 （50日間）	第5回九州沖縄八県連合共進会 （福岡県主催）	春吉村岡新地（東中洲）	847,769人	崇福寺福岡博物展覧会も開催
2	明治41年 （1908）	10/1～10/21 （21日間）	全国子供博覧会	東中洲共進館・洲崎福岡県物産陳列場	151,620人 （招待含むと16～17万人）	会場間に渡船が運航 東西幹線道路新設のため中洲橋架替え：泥川橋（天神橋）新設 博多築港竣工
3	明治43年 （1910）	3/11～5/9 （60日間）	第13回九州沖縄八県連合共進会 （福岡県主催）	因幡町（現アクロス・天神中央公園・市役所付近）	914,000人	肥前堀埋立、市内電車開通（花電車運行開始） 貴賓館（福岡県公会堂）完成 筥崎参道に潮湯「抱洋閣」・「箱崎水族館」完成 市内電車循環線敷設開始
4	大正3年 （1914）	4/23～6/30 （69日間）	明治記念博覧会	下警固法印田（天神）	10万人余	市内電車千代町～博多開通(循環線全通) 名島弁天橋（名島橋）架橋
5	大正4年 （1915）	4/1～5/10 （40日間）	九州沖縄勧業共進会 （福岡市主催）	第13回九州沖縄八県連合共進会跡地	329,971人 （有料のみ） 優待含むと60万人以上	県庁新庁舎が落成
6	大正7年 （1918）	4/10～5/9 （30日間）	九州沖縄物産共進会 （福岡県実業団体連合会主催）	須崎裏・大濠	155,385人	百道海水浴場が開場(福岡日日新聞社開設)
7	大正9年 （1920）	3/20～5/20 （62日間）	福岡工業博覧会 （九州電気協会・化学工業協会主催）	須崎裏・西公園下	91万人	共進橋（弁天橋）の架替え
8	大正10年 （1921）	4/1～5/10 （40日間）	コドモ博覧会 （福岡日日新聞社主催）	西公園下堀端	122,024人	赤ん坊大会が好評で、以後毎年「西日本赤ん坊大会」開催
9	大正11年 （1922）	3/25～5/15 （52日間）	（長政公三百年祭記念）家庭博覧会 （福岡市工芸団体連合会・福岡市十日会主催）	西公園下	111,968人	西新町・住吉町を福岡市に編入
10	昭和2年 （1927）	3/25～5/23 （60日間）	東亜勧業博覧会 （福岡市主催）	大濠公園	1,603,472人	市内電車城南線開通、市内バス運行開始 終了後会場を大濠公園に整備
11	昭和3年 （1928）	4/1～4/25 （25日間）	（筥崎八幡宮奉祝記念）海軍博覧会 （福岡日日新聞社・海軍協会福岡県支部主催）	箱崎浜汐井参道	15万人	堅粕町・千代町を福岡市に編入
12	昭和10年 （1935）	10/12～10/17 （6日間）	第8回九州連合畜産共進会 （福岡県主催）	平尾九水グラウンド(薬院4丁目)		
13	昭和11年 （1936）	3/25～5/13 （50日間）	博多築港記念大博覧会 （福岡市主催）	福岡海岸（長浜・舞鶴）	1,608,119人	西大橋・天神橋架替え 雁ノ巣飛行場開場 岩田屋デパート開店
14	昭和14年 （1939）	4/1～5/14 （44日間）	聖戦博覧会 （九州日報社主催）	大濠公園		九州鉄道福岡～大牟田線全通 大博通り(博多駅～築港)完成
15	昭和17年 （1942）	9/24～11/12 （50日間）	大東亜建設博覧会 （西日本新聞主催）	百道松原海岸	50～60万人	市内電車城南線の複線化 今津村を福岡市に編入 西日本新聞創刊(福岡日日新聞と九州日報の統合) 西日本鉄道株式会社発足
16	昭和41年 （1966）	3/19～5/29 （72日間）	明日をつくる科学と産業－福岡大博覧会 （西日本新聞社主催）	大濠公園	1,833,996人	西日本新聞創刊90周年記念 千鳥橋・柳橋完成
17	昭和50年 （1975）	3/15～5/25 （72日間）	福岡大博覧会（新幹線開通記念） ～人間・自然・科学のシンフォニー～ （福岡県・福岡市・西日本新聞社主催）	大濠公園 舞鶴公園	2,143,369人	早良町を福岡市に編入 山陽新幹線博多乗入れ、博多駅デイトス商店街オープン 九州自動車道古賀～鳥栖間開通 大濠公園のデーメーテール像（原田新八郎作） 市内電車貫線・城南線・呉服町線廃止 地下鉄建設開始
18	昭和57年 （1982）	3/19～5/30 （73日間）	ふくおか'82大博覧会（地下鉄開通記念） ～21世紀の豊かな人間生活～ （西日本新聞社主催、福岡県・福岡市後援）	大濠公園	1,360,850人	市営地下鉄開通 旧西区を城南区・早良区・西区に分割
19	平成元年 （1989）	3/17～9/3 （171日間）	アジア太平洋博覧会（よかトピア） （福岡市主催）	シーサイドももち	8,229,399人	市制施行100周年

※『福岡市史』・『写真集　福岡市市制百周年記念　ふるさと100年』などから作成